

説文解字篆韻譜に見える説文解字繫傳 25 卷所収文字の状況

鈴木 俊哉[†] 鈴木 敦[‡] 菅谷 克行[‡]

suzuki toshiya[†] Atsushi Suzuki[‡] Katsuyuki Sugaya[‡]

[†]〒739-8511 広島県東広島市鏡山 1-4-2 広島大学 総合科学研究科

[‡]〒310-8512 茨城県水戸市文京 2-1-1 茨城大学 人文学部

概要: 徐鍇『説文解字繫傳』のうち散逸した巻 25 の説文小篆について、『説文解字篆韻譜』10 巻本所収字から採集し、復元を試みた。現行小徐本が大徐本から補った 547 字のうち、『篆韻譜』から 544 字を得ることが出来た。現行小徐本の祁寯藻本と述古堂本の小篆字形は往々にして異なることが知られるが、『篆韻譜』から採集された字形は述古堂本とは一致するものが見える。この結果の背景について若干の考察を加える。

1. はじめに

『説文解字』は秦代の小篆に基づいて漢の許慎が編んだ最初の部首引き字書である[1][2]。宋初に徐鉉が校訂したいわゆる大徐本が現在完本として残る最古の資料であり、これが定本として用いられる。大徐本以前の説文は唐写本木部残巻や口部断簡などの微細なものしか残っていないが、その内容は小徐本とは完全には一致しない。徐鉉は当時通行していた説文をそのまま翻刻するのではなく、許慎原本に近づけようと校訂したと考えられているが、その結果、大徐本を通してそれまでに通行していた説文の様子を知ることが難しくなっている。これを補う資料として重視されるのが、大徐本に先行して弟の徐鍇が編んだ『説文解字繫傳』(以下、小徐本)である[3]。小徐本は唐代に現在の説文の玉箸体を導入したと言われる李陽冰刊訂説文に関する記述を含むだけでなく、唐代の説文断片との比較から大徐本よりも当時通行の資料に近いと推定されている[4][5]。

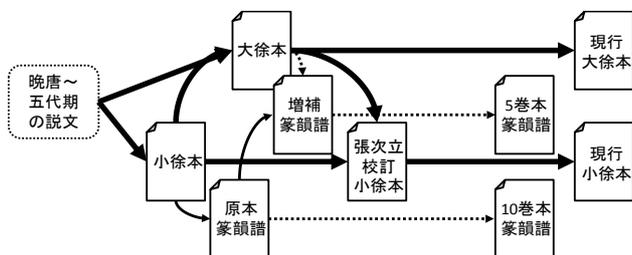


図 1: 説文および篆韻譜の参照関係の伝統的な推定

しかし、現行小徐本は宋代の張次立の校訂によって大徐本の内容が混ざっており、さらに巻 25 は散逸し大徐本で置き換えられている¹。このため、現行小徐本を小徐原本として扱うことはできない[6][7]。段玉裁は『古今韻會舉要』が引く小徐本が現行小徐本と異なることに注目し、ここから校訂前・散逸前の情報を得られると主張した[1][8][9][10]。これに関しては、引用が忠実でないための差異であり、校訂後・散逸後の状況しかわからないという指摘もある[11]。しかし、仮に何らかの字書に引かれた説解が小徐原本に由来するとしても、小篆字形の情報は得られない。この難点について、糸原氏が徐鍇の別の著作『説文解字篆韻譜』(以下、『篆韻譜』) 10 巻本によって小徐原本の字形が推測でき

る可能性を示した[12]。糸原氏は、『篆韻譜』10 巻本には大徐本の影響がほとんど見られないという工藤氏の指摘[13][14]を受け、説文の部首字について汲古閣大徐本・述古堂小徐本と比較し、現行小徐本の小篆字形は張次立によって大徐本に寄せられており²、小徐原本の字形を推定するには『篆韻譜』が有力な材料であることを指摘した。

筆者らは、説文は同一版本であっても字形には揺れがあり、校訂を行う際の字形差の判断基準も研究者によって違いがあるため、現行小徐本と『篆韻譜』の比較から小徐原本の状況を推測するにはさらに検討が必要と指摘したが[16]、『篆韻譜』が小徐原本の姿を推定する重要な材料であるという糸原氏の指摘の妥当性には疑いはない。そこで、本稿では『篆韻譜』10 巻本所収字から、小徐本巻 25 に含まれていたと思われる小篆の状況を調査した結果を報告する。

2. 説文解字と篆韻譜について

『説文解字』は様々な音義書・字書の編纂や唐代以降の正字政策などに利用された。説文の部首排列は『字林』(晉)、『玉篇』(梁)、『類篇』³(宋)と引き継がれたが、唐代では、部首引き字書よりも、むしろ陸法言「切韻」に始まる韻書に文字を追加した字書が優勢であったと思われる。実際、敦煌文書に見える字書類には切韻類の断片が多いが、説文や字林の断片は未だに見つかっていない。このような状況を反映してか、徐鉉が徐鍇に編ませたと思われるのが説文小篆を韻書の排列で並べなおした『篆韻譜』である。その後、徐鉉は逸書「李舟切韻」によって改めて増補版を作ったとされる[13][14]。

2.1 二種類の篆韻譜の起源に関する研究

現在伝わる『篆韻譜』には元刊本まで遡れる 5 巻本と、清代写本まで遡れる 10 巻本の 2 つの系統がある[17]。韻目が細かく分かれ収字数も多い 5 巻本がより新しいとする見方が研究者の合意するところである。伝統的な見方は、図 1 に示すように 10 巻本が徐鍇原本の系列、5 巻本が徐鉉の増補版の系列とする⁴ものである。しかし、10 巻本に新修字⁵が

² 一方、古文・籀文字形は小徐原本の字形を残したと糸原氏は推測する。

³ 『類篇』は先行する韻書『集韻』を排列しなおして編まれたものであり、最初から部首引き字書を編纂する計画によるものではない。

⁴ 現行の『篆韻譜』は 10 巻本と 5 巻本で内容に大きな差があるが、徐鉉が増補と同時に 5 巻に再編したという明らかな証拠はない。王勝昌氏によれば、目録・書誌類に見える最も早い 5 巻本の言及は趙希弁による『郡齋讀書志』への「附志」(1250)にみえる「篆韻五卷」だが、晁公武(1105~1180)による同書本編の巻 4 には「説文解字韻譜十卷」の記録も見えるという。また、最も遅い 10 巻本の言及は焦竑(1540~1620)『國史經籍志』の「説文韻譜十卷」という[17]。

⁵ 大徐本には、徐鉉が 2 種類の文字を追加したことが述べられている。一つ

¹ 張次立校訂の段階で全巻が残っていたかは明らかでない。張次立は北宋石經(1041~1061)に名前が見えるなどから、小徐本の校訂も嘉祐年間(1056~1063)と推測されるが[12]、現行小徐本の末尾にある熙寧 2 年(1069)の蘇頌による跋ではその時点で巻 25、巻 30 が欠けていたことを記録する。

含まれていることから、10 巻本が徐鉉増補後、5 巻本は廣韻による増補後とする小川の説がある[1][18]。この問題に対し、工藤氏は、大徐・小徐本で小篆に字形差がある場合 10 巻本はどちらに近いが、5 巻本で増補された内容は廣韻でなければ説明がつかないか、などを詳細に検討した[13][14]。その結果、小徐本特有の字形が 10 巻本に見える一方、5 巻本ではそれらが小徐本字形に変更されていること、5 巻本で増補された文字の反切の多くが廣韻ではなく大徐本に揃うことなどから、10 巻本は大徐増補以前、5 巻本は大徐増補以後という伝統的な見方を支持した。10 巻本になぜ新修字が含まれるかなど未解決の問題もあるが⁶、10 巻本の字形に大徐本の影響が見られないのであるから、小徐原本の字形を推定する材料に 10 巻本を取り上げた糸原氏の態度は妥当なものであろう。

2.2 篆韻譜と説文の比較に関する先行研究

『篆韻譜』は小篆字形を示すが、説解は大幅に削られ、その説解も説文ではなく玉篇や韻書に由来するものが混じるとの指摘がある[19]。このため、『篆韻譜』単体では説文学の材料とし難い。王筠は「李舟切韻」に関する興味から、『説文韻譜校』(以下、『韻譜校』)にて 5 巻本を大徐本・小徐本・廣韻・宋本玉篇などと比較し、脱字・増字、大徐本との字音の異なりなどを調査した⁷。その後、馮桂芬は 10 巻本を翻刻するにあたり⁸、『篆韻譜』によって通行の説文を補正できることなどを指摘している⁹が、たとえば『説文解字詁林』は『篆韻譜』を採録しておらず、説文学の材料としての評価はあまり高いとはいえない。10 巻本と 5 巻本の反切の分析は王勝昌氏[17]や上田氏[19]により為されている。上田氏は 5 巻本の反切は 10 巻本から引き継がれているものがあり、単純な整理で「李舟切韻」の全体を議論できないことを指摘した。上田氏は『篆韻譜』5 巻本・10 巻

は説解に見えるが見出し字として掲出されないものを追加したグループで、新修字と呼ぶ(巻 15 下の「新修字義」参照、19 字)。馮桂芬は 10 巻本を翻刻した段階で、既に新修字 19 字のうち 13 字が 10 巻本に見えることを発見している。もう一つは、經典に見えるが説文に見えないものを各部首末に追加したグループで、新附字と呼ぶ。小徐原本には新修字も新附字も未収と考えられている。工藤氏の調査では 5 巻本は新附字 402 字のうち 279 字を収めるといふ[13]。

⁶ 工藤氏は、遠藤氏による指摘として、新修字は小徐原本が編まれた後の研究で見つかり、その一部が篆韻譜を編む際に組み込まれた可能性を挙げている[13]。小川の指摘でもう一点重要な指摘を挙げるとすれば、小徐本は既に「李舟切韻」を参照するにもかかわらず(小川は具体例を挙げないが「愆」の説解などに見える)、大徐による後序は増補の際に「李舟切韻」が有用であったと、あたかもそれまで使ったことがなかったかのように書かれている、という指摘である。小徐が「李舟切韻」を知っていたとすれば、なぜ別の韻書で不完全な篆韻譜を編んだか自明でないが、この指摘は 10 巻本を大徐増補後と見ても解決するわけではない。

⁷ ただし、王筠や馮桂芬の時代に通行していた 5 巻本は、現在四部叢刊や天理図書館善本叢書で流通している元刊本ではなく、四庫全書などに近い函海本である。

⁸ 馮桂芬は、当時流通していた 5 巻本に徐鉉が増補したことを述べる後序が附属していることをもって増補版と考えたが、実際にはこの後序は底本になかったものを『徐公文集』から補ったもので、より古い元刊本には後序は見えない。この判断に関しては工藤氏の批判がある[15]。また、小川は『徐公文集』の後序は篆韻譜を 10 巻と書いているが、その部分を 5 巻と変えて挿入したことを批判している[18]。

⁹ 福田氏は馮桂芬の指摘について、小徐本の補正 24 条、函海本の補正 25 条などを数えている[2]が、筆者らが見たところ、前者は篆韻譜 5・10 巻両本が正しく二徐とも誤るものや、篆韻譜 5 巻本が正しく二徐が誤るもの、小徐本と 5 巻本が正しく大徐本が誤るもの、などが混じっており、10 巻本に限定せずに篆韻譜の意義を述べたように思われる。

本の小韻首字の対応表を作成したが、他の切韻逸文とは区別している。

このように『篆韻譜』の研究は説文学の分野というより音韻学や韻書史の観点で研究されてきたと言える。このため『篆韻譜』と説文の全面的な字形対応表は作成されておらず、比較は基礎的な段階からはじめなければならない。

3. 『篆韻譜』字形対応表の作成の問題点

『篆韻譜』と説文の字形対応について定本と言える先行研究が見当たらないため、本稿では改めて作成した。興味の対象は 10 巻本の小篆字形だが、これを既存のデータを組み合わせて説文と対応づけるのに以下のような困難がある。

- イ) 10 巻本は廣韻より古い韻書に基づくため、たとえば説文解字注データ[21]の見出し字¹⁰を宋本廣韻データ[22]によって排列し直しても多くの例外が出る。韻目の数も違うので、全く対応つかない状況もありうる。
- ロ) 一つの見出し字に複数の音価がある場合、複数箇所で見出される(又音字)¹¹。10 巻本で単音字であるものが 5 巻本で又音字となる状況も少なくないが、逆に廣韻で又音字であっても『篆韻譜』では単音字である場合も少なくない。イ)によって大半を処理して残ったものをロ)で突き合わせるような絞込み方はできず、必ず全体と突き合わせる必要がある。
- ハ) 糸原氏が指摘するように、10 巻本は大徐・小徐のどちらも小篆字形が異なる場合があるが、説解が削られているため、小篆字形だけを見て同一字として判断して良いかが明らかでない状況がある。
- ニ) 工藤氏が指摘するように、『篆韻譜』は 10 巻本の段階で「説文にあるが篆韻譜にない文字」が存在する。イ)に関しては、今後、廣韻より古い切韻系資料のデータベースの拡充によって解消が期待されるが、上田氏が収集した切韻逸文[19]などではまだ『篆韻譜』に対するカバー率は高くない。ロ)の問題については『韻譜校』の「重文」¹²リストを活用する方法が考えられるが¹³、王筠は廣韻や大徐本の音価と一致する場合に重文に分類するものの、それらと異なる場合は「錯見」¹⁴や「攷異」¹⁵で言及している。さらに、「重文」とされたものの中には、説文における同形異字のような関係のものも含まれているため、5 巻本と説文の対応だけに絞っても、『韻譜校』の研究結果をただあてはめるだけでは不十分である。『篆韻譜』を韻書と見て韻目・小韻・反切から整理するか、字様書と見て字形で整理するかで手順はかなり異なるが、本稿では字形から整理することとし、以下のような手順をとった。

¹⁰ この他、ctext.org による説文解字のデジタルテキストも存在するが、巻号に誤りがあり(標目巻を巻 1 とする)、古文や籀文を省略することなどから、対応表作成の目的には扱わず。

¹¹ 工藤氏による調査[23]では又音字は 210 字。おそらく工藤氏は見出し字を単純に数えるのではなく、古文・籀文などの異体字が列挙される場合にそれらをまとめて数えており、210 字種と解釈するのが良いと思われる。筆者らが個別の字形単位で調査した結果は 536 字にのぼる。さらに『韻譜校』が見落としたりと思われるものもあるが、稿を改めて報告したい。

¹² 『説文解字』が「重文」と言うとき、古文や籀文あるいは或体などの正篆に対する異体字を指すが、『韻譜校』でいう重文とは基本的には全く同じ字形のものが複数の韻目に掲出されている状況を指す。

¹³ 工藤氏のご教示による。

¹⁴ 『韻譜校』は大徐本の音価と異なる所属韻に見えるものを「錯見」に集める。工藤氏による調査[23]では 186 字。

¹⁵ 『韻譜校』は説解に疑問があるものを「攷異」に集める。筆者らによる調査では 856 字形。

- ① 10 巻本と 5 巻本の小篆を全て切り抜く。
- ② それぞれ掲出順に並べ、前後の並びが近く字形も似ているものを対応づける。
- ③ 両本で対応づかなかったものに対し、UCS 漢字（複数）を関係づける。
 - A) 5 巻本の小篆は 5 巻本の説解が示す UCS 漢字に関係づける。
 - B) 10 巻本の小篆に UCS 漢字を可能な限り（複数）対応づける。
- ④ 関係付けた UCS 漢字に重なりがあるものを確認し、対応もれを埋める。
- ⑤ 関係付けた UCS 漢字を説文解字注データ[21]および華東師範大学の小篆フォント¹⁶とその UCS 対応データ[24]により説文小篆に対応づける。

このようにして作成したリストに対し、『韻譜校』が指摘する部分を確認し校正した。

本稿では紙幅の制限のため、巻 25 所収字のうち、対応字が『篆韻譜』に見つからないもの、および、対応字があるが字形差が見られるもの 131 字を表 1 に示した。本稿執筆時点では対応表は未だ校正中であり¹⁷、対応字が『篆韻譜』に見つからないものが実際には作業漏れである可能性を完全には排除できないが、少なくとも対応づけられた文字は『篆韻譜』に存在することは言える。

4. 対応表の概観

本稿の手法で作成したデータベースでは、小徐本巻 25 に対応する範囲の文字として、以下のような字数を得た。巻 25 所収字で 5 巻本に見えない文字は全て『韻譜校』で指摘されていることを確認できている。

- 大徐本(岩崎本、新附字含む) 562 字
- 現行の小徐本(祁寯藻本および述古堂本) 547 字
- 篆韻譜 10 巻本(馮桂芬翻刻本) 544 字
- 篆韻譜 5 巻本(天理図書館所蔵元刊本) 549 字¹⁸
 (現行小徐本にあり 5 巻本にあるもの 537 字)

一見して、収字数の差はそれほど大きくないことがわかる。

4.1 篆韻譜 10 巻本に見えない文字について

現行小徐本にあるが 10 巻本に無い字は縫(180)、緞(280)、蛾(355)の 3 字である。これらが 5 巻本と異なる音価、あるいは何らかの字形差を持って 10 巻本に含まれている可能性はまだ排除し切れないが、小徐以前の字書の掲出状況について確認すると以下のようである。

- 縫
 この文字は原本玉篇に見える。「野王案説文以鍼鉄衣也」(この説解は大徐本と一致する)の語が見え、原本説文の状況はわからないが、小徐原本や篆韻譜原本には含まれており、現行 10 巻本では脱落していると考えられるのが自然であろう。

- 緞
 この文字は新修字で、原本玉篇にも見えるが、説文は引かれない。10 巻本は新修字 19 字のうち 13 字を収めることからすると、小徐本にはなく、篆韻譜原本には含まれていたものが、後に脱落した可能性がある。ただし、「緞」をその説解に含む見出し字、「嚙」と「素」を現行小徐本および 10 巻本で確認すると、現行小徐本の「嚙」の説解には「緞」が見える¹⁹が、10 巻本では「嚙、莫賢反。目旁薄綴。」²⁰「素、質也。」などとなっており、「緞」を用いない。小徐が『篆韻譜』に新修字を加える方針であっても、その段階で用いた資料には「緞」は不要であったかもしれない。

- 蛾
 虫部・蝨部は原本玉篇残巻が無く、この文字の大徐本以前の字書の掲出状況がはっきりしない。大徐本においては、現在の“moth”の意味での文字は「蝨」(「蠶、蠶化飛蟲。」の或体)である一方、「蛾」の大徐本での説解は「羅也」である。王仁昫刊謬補欠切韻(王三)では「蝨」を掲出せず、「蛾」を蠶によって注しており、また篆隸萬象名義も蛾・蠶を掲出するが「蝨」は見えない。このことから、蛾・蝨の意味的な使い分けは唐代には難しくなっていたと思われる。徐鉉もまた爾雅をひいて「臣鉉等案、爾雅蛾羅蠶我也。」とし²¹、蝨の重出字と見る。このように蝨と別箇所で掲出する理由の説明が難しい文字を積極的に加えるとは考え難く、徐鉉が参照した資料の多くに最初からあったと考えるのが自然ではないだろうか。ただし、小徐がそのような文字を採らず、小徐原本や 10 巻本は最初から「蛾」を収めなかったという可能性もあるかもしれない。

以上から、「緞」は小徐原本が収めなかった可能性が高く、「蛾」もその可能性があると思われる。しかし、全体として見れば、小徐原本の巻 25 と、大徐本の対応関係にある部分に、文字集合として目だった差は無かったのではないかと推定される。

4.2 字形差について

現行小徐本の巻 25 は全て大徐本に由来するため、何らかの字形差があるとすれば、

- 大徐本・現行小徐本の字形に強い類似性があり、
- 大徐本の増補を受けた 5 巻本も類似性があり、
- 10 巻本だけが異なる。

という状況が多いと推測される。しかし実際に対応表を作成すると、そのような状況は確かにあるが(「綱」(128)、「罍」(257)、「緡」(258)、「轡」(298)、「辵」(299)、「蠅」(349)、「蟬」(450)、「蝨」(482)、「蠹」(513)、「虬」(527)など)、10 項前後である。一方、述古堂本と 10 巻本が類似し、他の

¹⁹ 「素」は小徐本巻 25 所収字なので小徐原本の説解は推測できない。

²⁰ 10 巻本の「嚙」の説解が説文ではなく他の資料に由来する可能性は否定できないが、王仁昫刊謬補欠切韻は「嚙」を含まず、篆隸萬象名義の説解は「莫縁反、點、密」、宋本玉篇の説解は「莫縁切。説文曰目旁也。爾雅曰密也。」などであって、「緞」も「綴」も使われていない。「綴」を疑うのであれば、説文以外の資料を仮定するより、「綴」を「緞」の誤写と見るほうが自然かもしれない。

²¹ 唐開成石經の爾雅は「蝨羅」と刻んでおり、このままでは徐鉉の根拠とならないが、王仁昫刊謬補欠切韻や篆隸萬象名義の状況から、すでに蛾・蝨の使い分けはされておらず、徐鉉が参照した爾雅は「蛾」を用いていた可能性は残る。

¹⁶ このフォントのグリフが何を参照しているか、製作者は明らかにしていないが、筆者らの調査では汲古閣本と非常に良く一致し、アウトラインにも細かなノイズが残ることから、汲古閣本のスキャンデータに基づくと思われる。

¹⁷ 本稿執筆時点で、10 巻本・5 巻本両本に見えるものが 10505 字形、10 巻本にしか見えないもの 255 字形、5 巻本にしか見えないもの 715 字形である。又音字は全て掲出回数ぶん数えた結果である。

¹⁸ 大徐本にあって 5 巻本に無い 13 文字については全て『韻譜校』の説文で指摘されている。

表 1: 現行小徐本巻 25 所収字において、岩崎本、祁寯藻本、述古堂本、『篆韻譜』10 巻本、『篆韻譜』5 巻本の間に字形差が見えるものの一覧

各行番号は大徐本糸部～卯部の見出し字通し番号である(古文・籀文も枝番でなく個別に振るため、一篆一行本などを元にする番号とは若干の異なりがある。また新修字、新附字とも含む)。各資料間に字形差が見えないものは示していないので番号に飛びがあることに注意されたい。各欄に示した字形はそれぞれ以下の資料からとった。岩: 岩崎本(四部叢刊影印)、祁: 祁寯藻本(華文書局影印)、述: 述古堂本(四部叢刊影印)、10 巻本: 馮桂芬翻刻本(早稲田大学蔵)、5 巻本: 天理大学図書館所蔵本。

10 巻本と 5 巻本は掲出箇所を

{声調}{声調内韻目番号}{韻目字}{韻目内通し番号}

の形式で示す。10 巻本は各声調をさらに 2 巻に分けて声調内の韻目番号も独立に附されるため、声調に上・下を付した。5 巻本で対応字が見えず、韻譜校で指摘されており、欠落が確実な場合は当該箇所「(欠)」を記入した。

#	UCS	岩	祁	述	10 巻本	5 巻本	字形差
002	𠄎 (糸の古文)	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎 入下 03 錫#75	𠄎 入 23 錫#81	述古堂本と 10 巻本のみ字形は古文だが書風は玉箸体のまま。
003	繭	繭	繭	繭	繭 上下 01 統#20	繭 上 27 統#20	述古堂本と 10 巻本のみ冠が異なる。繫傳校録が記す朱竹君本字形は 10 巻本に近い。
004	緝	緝	緝	緝	緝 上下 01 統#21	緝 上 27 統#21	述古堂本と 10 巻本のみ糸が古文化していない。
039	賁	賁	賁	賁	賁 下平下 03 庚#09	賁 下平 13 庚#09	述古堂本と 10 巻本、5 巻本(10 巻本と同じ箇所についてのみ)は左右の又が繋がっている。
042	𦉳	𦉳	𦉳	𦉳	𦉳 上下 04 小#30	𦉳 上 30 小#30	述古堂本と 10 巻本のみ部品も配置も異なる。繫傳校録では朱竹君本も同様とする。
043	緝	緝	緝	緝	緝 上下 02 饗#30	緝 上 28 饗#28	岩崎本、述古堂本と 10 巻本の欠の字形が異なる。
046	緝/緝	緝	緝	緝	緝 去上 01 送#50	緝 上平 03 鍾#84	述古堂本と 10 巻本、5 巻本(10 巻本と同じ箇所についてのみ)従の構造が異なる。
062	緝	緝	緝	緝	緝 上下 04 小#61	緝 上 29 篠#14	述古堂本のみ筆写化している。
065	緝	緝	緝	緝	緝 上上 02 饗#108	(欠)	韻譜校が 5 巻本での脱落を指摘(上 16 軫)。
074	緝	緝	緝	緝	緝 下平下 06 青#110	(欠)	韻譜校が 5 巻本での脱落を指摘(下平 16 青)。繫傳校録は韻本の字形が異なると指摘する。朱竹君本は述古堂本などと同じとする。
084	緝	緝	緝	緝	緝 下平下 13 蒸#48	緝 下平 17 蒸#51	述古堂本のみ異なる。
087	緝	緝	緝	緝	緝 上下 04 小#11	緝 上 30 小#11	述古堂本のみ異なる。
095	緝	緝	緝	緝	緝 上平上 05 支#143	緝 上平 05 支#149	述古堂本と 10 巻本、5 巻本は「玉」であるべきところが「土」になっている。繫傳校録は朱竹君本や玉篇は述古堂本に近い字形である一方、韻本は説解にあわせて改めているとする。
101	緝	緝	緝	緝	緝 去下 11 霰#47	緝 去 32 霰#50	10 巻本、5 巻本とも「日」であるべきところが「目」になっている。

106	緝/緝	緝	緝	緝	緝 入上 03 燭#38	緝 入 03 燭#35	述古堂本のみ「水」を「糸」に書いている。
117	祗	祗	祗	祗	祗 上上 11 霽#16	祗 上 11 霽#16	述古堂本の字形は誤り。繫傳校録では両朱本(朱竹君本、朱文藻本)も同様に誤るとする。
127	緝	緝	緝	緝	緝 下平下 15 咸#23	緝 下平 27 咸#29	述古堂本と 10 巻本のみ異なる。
128	緝	緝	緝	緝	緝 上下 11 敢#08	緝 上 49 敢#08	10 巻本は説解が「帛雖色也」であることから字形の誤りとわかる。5 巻本の説解は「作後非」である。
130	緝	緝	緝	緝	緝 下平下 07 尤#204	(欠)	韻譜校が 5 巻本での脱落を指摘(下平 19 尤)。
132	緝	緝	緝	緝	緝 上平上 10 虞#65	緝 上平 10 虞#66	而の字形は述古堂本と 5 巻本が一致し、10 巻本は大徐本と一致する。
134	緝	緝	緝	緝	緝 上上 04 紙#89	緝 上 04 紙#94	鹿の字形は祁寯藻本と述古堂本で一致するが、篆韻譜は大徐本に一致する。
146	緝	緝	緝	緝	緝 上平下 02 佳#10	緝 上平 13 佳#10	述古堂本と 5 巻本は一致するが 10 巻本は大徐本に近い。
147	緝	緝	緝	緝	緝 入下 06 陌#41	緝 入 20 陌#37	5 巻本のみ異なるが、天理本では補写の部分である。
150	緝	緝	緝	緝	緝 上平下 15 刪#05	緝 上平 26 刪#05	5 巻本は説解が「青田糸系綬」であることから、小篆も説解の楷書も誤りとわかる。
152	緝	緝	緝	緝	緝 上平下 14 桓#19	緝 上平 25 桓#19	述古堂本のみ異なる。
157	緝	緝	緝	緝	緝 下平下 10 侵#65	緝 下平 22 侵#65	述古堂本と 10 巻本、5 巻本が一致する。繫傳校録は金の字形が朱竹本では孫本や鮑本と同じで、韻本は異なるとする。
164	緝	緝	緝	緝	緝 下平下 09 戈#29	緝 下平 09 戈#31	述古堂本のみ異なる。
167	緝	緝	緝	緝	緝 去上 01 送#51	緝 上平 03 鍾#83	述古堂本と 10 巻本のみ異なる。
173	枚/栢	枚	枚	枚	枚 下平下 02 唐#41	枚 下平 12 唐#44	祁寯藻本のみ異なる。繫傳校録は韻本のみに作り、朱竹本などは玄に作るとする。
178	緝	緝	緝	緝	緝 去下 12 線#02	緝 去 33 線#02	述古堂本と 10 巻本のみ異なる。
180	緝	緝	緝	緝	(欠)	緝 上平 03 鍾#72	
184	緝	緝	緝	緝	緝 上上 02 饗#81	緝 上 28 饗#82	而は二徐と篆韻譜で異なる。
193	縶/縶	縶	縶	縶	縶 入下 02 霽#53	縶 入 17 霽#51	述古堂本と 10 巻本、5 巻本が異なる。
195	緝	緝	緝	緝	緝 下平下 13 蒸#31	緝 下平 17 蒸#32	述古堂本のみ筆写化。
207	輔/輔	輔	輔	輔	輔 去上 04 至#63	輔 去 06 至#63	述古堂本のみ崩れている。
211	緝	緝	緝	緝	緝 上平下 11 元#55	緝 上平 22 元#55	10 巻本と 5 巻本のみ異なる。
222	緝	緝	緝	緝	緝 入下 02 霽#11	緝 入 17 霽#11	述古堂本のみ筆画の繋がりが異なる。祁寯藻本は横画の長さが異なる。

225	緹					下平 _下 14 登#42 下平 _下 18 登#40	岩崎本のみ異なるが、誤りか。
227	緹					入 _上 06 聿#12 入 _上 06 術#21	古文への変形の度合が各本で異なる。
228	緹					入 _上 06 聿#11 入 _上 06 術#22	古文への変形の度合が各本で異なる。
231	紫					入 _下 14 業#26 入 _上 18 業#27	述古堂本と 10 巻本のみ異なる。
234	紫					去 _上 07 御#33 去 _上 09 御#34	述古堂本と 10 巻本、5 巻本が異なる。
237	紉					去 _下 22 宕#16	韻譜校が 5 巻本での脱落を指摘 (去 42 宕)。
244	紉					去 _上 04 至#115 去 _上 06 至#116	述古堂本と 10 巻本のみ欠に異なる。岩崎本は「二」がなく、誤っている可能性がある。
257	翠					上平 _上 07 之#29 上平 _上 07 之#32	述古堂本、10 巻本はそれぞれ異なる (述古堂本と 10 巻本の間でも異なる)。
258	緹					入 _下 03 錫#06 入 _下 23 錫#06	10 巻本は異なるが、誤りか。
272	緹					下平 _下 05 清#50 下平 _下 15 清#57	部品の接触が 10 巻本と 5 巻本のみ異なる。
278	緹					上平 _上 06 脂#15 上平 _上 06 脂#14	述古堂本と 10 巻本のみ糸を古文風にデザインしていない。
280	緹					去 _上 06 至#91	岩崎本の字形は誤りか。新修字なので小徐本には無いのが正しい筈。
281	緹					下平 _下 11 陽#105	新附字。
282	緹					上平 _上 08 微#41	新附字。
283	緹				(欠)		新附字。韻譜校が 5 巻本での脱落を指摘 (下平 20 矣)。
284	緹					上 _上 23 早#07	新附字。
285	練				(欠)		新附字。韻譜校が 5 巻本での脱落を指摘 (上平 09 矣)。
286	練				(欠)		新附字。韻譜校が 5 巻本での脱落を指摘 (去 19 代)。
287	練					上 _上 28 霽#32	新附字。
288	練					上 _上 20 阮#39	新附字。
293	綽					入 _下 14 業#42 入 _下 18 業#42	述古堂本の字形は誤りか。
294	綽					入 _下 14 業#41 入 _下 18 業#41	述古堂本の字形は誤りか。
298	綽					去 _上 04 至#41 去 _上 06 至#41	10 巻本の字形は楷書から逆算しているのではないか。
299	綽					上平 _上 15 刪#06 上平 _上 26 刪#06	10 巻本の字形は楷書から逆算しているのではないか。
302	蝮					入 _上 01 屋#180 入 _上 01 屋#189	耶高藻本と 10 巻本のみ一致し、他本は少しずつ異なる。

306	蝮					上 _上 15 軫#37 上 _上 16 軫#39	述古堂本と 10 巻本のみ異なる。
309	蝮					上平 _上 01 東#124 上平 _上 01 東#152	述古堂本と 10 巻本、5 巻本のみ从の構造が異なる。
313	蝮					去 _上 10 泰#44 去 _上 14 泰#45	耶高藻本以外は「出」が全て筆写化している。
315	蝮				(欠)		韻譜校が 5 巻本での脱落を指摘 (上 14 賄)。
319	蝮				(欠)		韻譜校が 5 巻本での脱落を指摘 (上 07 尾)。
327	蝮					入 _下 17 德#27 入 _下 25 德#27	述古堂本と 10 巻本、5 巻本は貸の構造が筆写化している。
330	蝮					下平 _下 07 尤#13 下平 _下 19 尤#99	述古堂本は底本が破損か。
340	蝮					去 _上 15 夫#14 去 _上 17 夫#11	述古堂本と 10 巻本のみ異なる。楷書からの逆算か。繁傳校録は鈕氏の参照した小徐本も述古堂本のようになっているとする。
345	蝮					下平 _下 01 陽#148 下平 _下 11 陽#153	述古堂本と 10 巻本、5 巻本は若干構造が異なる。
346	蝮					上平 _上 08 微#52 上平 _上 08 微#52	岩崎本のみ筆写化している。
347	蜀					入 _上 03 燭#43 入 _上 03 燭#40	述古堂本は楷書からの逆算か。
349	蝮					上平 _上 01 齊#135 上平 _上 12 齊#138	10 巻本は異なる。
355	蝮				(欠)		述古堂本の字形は別項で掲出される蝮。韻譜校が 5 巻本での脱落を指摘 (下平 08 歌)。
358	蝮					上平 _上 06 脂#69 上平 _上 06 脂#74	述古堂本と 10 巻本、5 巻本のみ異なる。繁傳校録は朱竹君本も述古堂本の字形であるとする。
363	董					下平 _下 02 唐#24 下平 _下 12 唐#27	述古堂本の字形は誤りか。
367	蚌					下平 _下 06 青#95 下平 _下 16 青#100	部品の繋がりが岩崎本、10 巻本、5 巻本で一致する。
379	蝮					下平 _下 06 青#65 下平 _下 16 青#68	述古堂本の字形は誤りか。
388	蝮					上平 _上 09 魚#41 上平 _上 09 魚#44	述古堂本の字形は誤りか。
394	蝮				(欠)		韻譜校が 5 巻本での脱落を指摘 (上平 12 齊)。
396	蛻					入 _下 01 屑#64 入 _下 16 屑#67	述古堂本の字形が崩れすぎている。
397	蛻					下平 _下 02 僂#72 下平 _下 02 僂#73	岩崎本の字形は誤りか。
398	蛻					入 _下 02 屑#24 入 _下 17 屑#24	述古堂本の字形は誤りか。
401	蝮					上 _上 01 董#02 上 _上 01 董#10	岩崎本の字形は誤りか。また述古堂本の字形も 1 画足りない。

407	蜡					述古堂本の字形は筆写化しすぎている。 去下 19 禡#14 去 40 禡#15
408	螟					而の字形は岩崎本と祁高藻本のみ一致する。 上下 02 禡#82 上 28 禡#83
412	蜚					述古堂本と 10 巻本のみ異なる。 入上 03 禡#30 入 03 禡#28
417	蜚					述古堂本の字形は誤りか。 入下 15 禡#54 入 19 禡#53
425	蜚					述古堂本の字形は誤りか。 下下 11 禡#20 下下 25 禡#20
431	蝻					5 巻本は説解が「蚌属」であることから、小篆も説解の楷書も誤りとわかる。 去上 12 祭#88 去 13 祭#89
446	蟹					述古堂本の魚がくずれすぎている。 上上 12 蟹#02 上 12 蟹#02
450	蚌					述古堂本と 10 巻本は異なる(述古堂本と 10 巻本も異なる)。 入下 15 禡#52 入 19 禡#51
458	蟹				(欠)	述古堂本と 10 巻本のみ欠について異なる。韻譜校が 5 巻本での脱落を指摘(入 10 月)。 入上 09 月#29
461	蚕/蠶					祁高藻本のみ構造が若干異なる。 上平 15 刪#21 上平 26 刪#23
462	閼					祁高藻本の門が異なる。 上平 06 眞#114 上平 17 眞#121
464	蛭/蛭 蛭					述古堂本と 10 巻本のみ異なる。繁傳校録は朱竹本も述古堂本のようにつくるとする。 上平 01 東#94 上平 01 東#120
468	蚕					新附字。 上 23 旱#13
469	蠶					新附字。 去 12 霽#96
470	蠶					新附字。 入 16 屑#97
471	蛭					新附字。 入 20 陌#08
472	蛭					新附字。 上 38 梗#40
473	蛭					新附字。 入 05 質#27
474	蛭					新附字。 下平 12 唐#12
478	蚕				(欠)	韻譜校が 5 巻本での脱落を指摘(下平 08 歌)。 下平 08 歌#33
482	蚕					10 巻本は異なる。 上平 01 東#22 上平 01 東#35
483	蝶					祁高藻本と 10 巻本のみ異なる。 上平 01 東#23 上平 01 東#36
485	蠶					岩崎本のみ異なる。 入下 02 薛#101 入 17 薛#101
488	蠶					述古堂本の字形は崩れすぎている。 下平 06 青#72 下平 16 青#77

490	蠶					述古堂本と 10 巻本のみ字形を誤っているのではないか。 入上 11 末#96 入 12 曷#04
494	蠶					述古堂本は目でなく日に誤る。繁傳校録は朱竹君本は目の下を「六」のように作るとする。 入上 05 質#64 入 05 質#66
497	蠶					祁高藻本、述古堂本、10 巻本が異なる。 上平 09 文#07 上平 20 文#07
501	蠶					岩崎本は石が筆写化している。 去上 09 暮#20 去 11 暮#20
502	蠶					祁高藻本、述古堂本、10 巻本は木の入り方が浅い。 去上 09 暮#21 去 11 暮#21
504	蚕					述古堂本と 10 巻本のみ異なる。 上上 11 齊#12 上 11 齊#11
507	蠶/蠶					岩崎本は縦画が足りない。 下平 07 尤#186 下平 19 尤#187
511	裁					述古堂本と 10 巻本のみ異なる(春を古文化していない)。繁傳校録は朱竹本が述古堂本や 10 巻本のような字形とする。 上上 16 準#16 上 17 準#16
513	蠶					10 巻本の小篆は誤り。帛に作るべきところを矛に作る誤りが多いと大徐本の説解で指摘されている。 下平 07 尤#197 下平 19 尤#198
523	咸					述古堂本と 10 巻本のみ異なる。繁傳校録は朱竹君本は述古堂本や 10 巻本のようにつくるとする。 上平 01 東#49 上平 01 東#65
527	颯					述古堂本と 10 巻本のみ異なる。10 巻本は誤りか。 下平 05 宵#66 下平 05 宵#70
534	颯					述古堂本の字形は誤り。 下平 01 陽#09 下平 11 陽#09
537	它					述古堂本と 10 巻本のみ異なる。 下平 08 歌#38 下平 08 歌#37
540	輿/輿/輿					繁傳校録は朱竹本では縦画がうねらないとする。 上平 06 脂#92 上平 06 脂#98
541	蠶					述古堂本と 10 巻本のみ異なる。 上平 02 冬#05 上平 02 冬#05
542	蠶					岩崎本の門が筆写化している。 下平 11 鹽#44 下平 25 鹽#44
545	蠶					述古堂本の電だけ異なるが崩れただけか。 入下 02 薛#51 入 17 薛#49
553	蠶					述古堂本と 10 巻本のみ異なる。 上平 10 虞#52 上平 10 虞#52
555	蠶					述古堂本と 10 巻本、5 巻本が異なる。 上平 05 支#169 上平 05 支#177
556	蠶					述古堂本、10 巻本、5 巻本は構造が異なる。また 10 巻本は「虫」を「云」に誤る。 上平 05 支#170 上平 05 支#178
560	蠶					祁高藻本と 10 巻本のみ異なる。 下平 05 宵#12 下平 05 宵#12
562	蠶					述古堂本が崩れている。 去下 08 換#13 去 29 換#13

版本は大徐本に揃う状況も少なくない（「繭」(003)、「親」(004) など 20 項以上）。述古堂・10 巻本・5 巻本が類似して大徐本と異なるものを含めれば、それらは 30 項を越える。

述古堂本のみが異なる状況も 20 項を越えるが、その多くは「繚」(062) や「繪」(084) のような字形の崩れや筆写化である。述古堂本・10 巻本が類似して異なるものは「繭」(003) や「親」(004) のようにより目立つものが多い。この結果から、述古堂本と 10 巻本の類似には何らかの背景があると思われる。

また、5 巻本の状況から別の知見も得られる。工藤氏は、10 巻本と 5 巻本を比較し、

- 10 巻本に見える小徐本特有の字形が 5 巻本では対応する大徐本字形になっている。
- 現行の 5 巻本で未収の平易な文字が現行 10 巻本の段階で既に未収である例が少なくない。

という 2 点から、「現在は伝わらない、小徐本の文字を全て備えた篆韻譜」を増補して 5 巻本が成立したのではなく、現行の 10 巻本に近い、脱落があるものを増補した可能性を指摘した。本稿の調査範囲でも、10 巻本字形が大徐本と異なる箇所の大半で、5 巻本は大徐本の字形を示しているが、5 巻本の字形が大徐本と異なって 10 巻本と整合する状況も見つかっている。特に「絢」(101) の誤字のように、誤りを補正しきれなかったように見えるものもあり、現行の 5 巻本は、現行の 10 巻本に近いものを増補した結果と見る工藤氏の推定は妥当と言えるだろう。

5. 述古堂本巻 25 と 10 巻本の類似の考察

前章で、現行の小徐本巻 25 の小篆字形は、10 巻本よりはるかに大徐本に近いと推定できるが、実際に対応表を作成すると、これとは異なる結果となったことを記した。10 巻本だけが異なる場合の数に比べると、述古堂本・10 巻本が共通して大徐本と異なる場合が少なくない。これをどのように解釈すれば良いだろうか。

まず考えられるのは、巻 25 以外の規則性が巻 25 にも敷衍された可能性である。糸原氏の研究では、小徐本と 10 巻本には部首字形「欠」のデザインが共通して大徐本と異なることが指摘されている。巻 25 においても述古堂本は「縊」(412)、「縊」(458) のように大徐本と異なるデザインの「欠」が見える²²。大半の巻において、ある部分図形に特有のデザインを用いるのであれば、巻 25 の書写においてもデザインが揃うことは不自然ではないだろう。

これに似たものに、述古堂本と 10 巻本は、古文・籀文の書風を篆文と書き分けない傾向がある。現行大徐本は、篆文を玉箸体で示すのに対し、(常にではないが少なくない箇所) 古文・籀文を懸針体に似た書風で示す²³。一方、小徐本でも述古堂本や 10 巻本にはそのような書き分けは全くと言っていいほど見られない。この書き分けは、多くの場合、単なる線質の違いだが、部首に関して古文・籀文が示される場合、大徐本では当該部首の古文・籀文の対応部首にもそれを用いる傾向が見られる。このために字形差が生じる場合がある。たとえば、巻 25 の部首である「糸」には、そ

の古文として 2 点少ない「糸」が示される。「繭」に対する古文として「親」(004) が示されるが、その説解は「古文繭糸見」であり、図形部品が「糸」なのか「糸」なのかは明確には示されない。岩崎本・祁寓藻本・5 巻本は「糸」に作るが、述古堂本・10 巻本は「糸」である。同様に、「縊」に対する古文として「縊」(178) があるが、説解は「古文縊」であり、字形の説明はない。この場合も岩崎本・祁寓藻本・5 巻本は「糸」に作るが、述古堂本・10 巻本は「糸」に作る。ただし、大徐本も必ずこのように書き分けるとは限らない。たとえば、「繪」(084) の籀文「絳」は、岩崎本も述古堂本も 10 巻本も、「糸」で作り、線質も玉箸体のままである(字形差なしと判断されるため、表 1 には含めていない)。小徐本の巻 25 を補うのに用いた大徐本がどの程度使い分けていたかは不明だが、述古堂本の状況は書風の使い分けない傾向が敷衍されたと考えても不自然ではない。

しかし、述古堂本と 10 巻本だけが類似するものの中には、部品の数や配置が異なるなど、デザイン傾向を敷衍した結果としては説明しづらいものも見える。たとえば「繫」(042)、「繫」(231)、「繫」(234)、「纏」(553) などである。さらに、5 巻本が大徐本と異なるものも含めるならば「繫」(193)、「縊」(309)、「縊」(327)、「縊」(345)、「縊」(358)、「縊」(555)、「縊」(556) も同様である。これらが小徐本と異なるのは述古堂本特有の問題だろうか。

巻 25 と大徐本の比較は清代に小徐本が再発見されて以降の研究があり、朱文藻・王憲『説文解字繫傳考異』(以下、『考異』)、祁寓藻本の校勘記、王筠『説文解字繫傳校録』(以下、『校録』) などに見える。それらによれば、本稿での「大徐本・祁寓藻本と異なり、10 巻本に似る」字形は、朱文藻

表 2: 四庫全書版小徐本の巻 25 で述古堂本や 10 巻本と類似するものの例

汗簡(四部叢刊影印)が説文を引くものについても掲出した。ただし、表 1 で述古堂本・10 巻本が大徐本と異なるものの全てが、四庫全書本において同様に異なるわけではない。四庫全書が大徐本に一致するものもある。

	岩崎本	述古堂本	10 巻本	四庫全書本	汗簡 (説文を引くもの)
親 (004)					
繫 (042)					
繫 (193)					
繫 (231)					
纏 (541)					

²² 「縊」の「欠」のデザインも同様であるが、岩崎本の「欠」は他の「欠」と異なるため、ここでは含めなかった。

²³ この書風差は、たとえば王國維が『魏三体石經考』で指摘する。古文・籀文で用いられる書風を唐写本の書風と区別すべきかに関しては啓功『古代字體論稿』などにも議論があるが、本稿では十分な議論をする紙幅がないので今後の課題としたい。

や朱竹君が所蔵した写本にも一部見えていたようである²⁴。それらの写本の再調査は困難だが、表 2 に示すように汪啓叔本の底本と同源と見られる四庫全書本にも一部見られる。

以上から、述古堂本に見える 10 巻本に似た字形は書写のミスや偶然の一致だけではなく、宋代から現行小徐本に至る系譜の中で変更されたものが混じっており、清代まで残った写本のいくつかはそれを引き継いだと推測できるだろう。

この変更がどの時点で何を根拠に加えられたか、いま判断する材料は無い。単なるミスであれば、書写を繰り返して後代になるほど字形が変わっていくと考えるのが自然である。しかし、類似した字形が『汗簡』にも見られることから、大徐本以外の資料を用いて、かなり早い段階で加わった可能性も考えられる。『篆韻譜』が説文よりも簡便な小篆の字形表として編まれ、徐鉉が増補する段階で既に刊本が存在したことを考えると、現行小徐本の巻 25 に影響を及ぼし得た資料には 10 巻本も含まれるであろう²⁵。

6. まとめ、今後の課題

本稿では、篆韻譜 5 巻本、10 巻本所収の小篆のうち、小徐本巻 25 に含まれていたと思われるものを収集し、全 547 字のうち 10 巻本からは 544 字を得た。異なり 3 字のうち、1 文字は原本玉篇が引く説文に見えるため小徐原本および原本篆韻譜にあった可能性が高く、また 1 文字は新修字であった。

また、収集した小篆字形を大徐本（岩崎本）、小徐本（述古堂本・祁寓藻本）と比較すると、10 巻本の字形が大徐本と異なる状況は少なくないが、必ずしも 10 巻本特有の字形でなく、述古堂本やその他の写本にも類似した字形が見られることがわかった。

この結果から、現行小徐本の巻 25 と大徐本の差異は、書写を繰り返す間に発生した揺れだけではなく、大徐本以外からの影響を受けている可能性があり、その原因として、10 巻本を考えることも不自然ではないと思われる。五代～宋代の大徐本以外への篆書資料との比較が今後必要である。

謝辞

本研究は科研費課題番号 26330377, 16K004600 の補助を受けました。また、大西克也先生、工藤早恵先生、高橋由利子先生、金木利憲先生、鈴木慎吾先生、東ヶ崎祐一先生、川幡太一氏に大変有益な議論と示唆を頂きました。ここに御礼申し上げます。

参考文献

- [1] 頼惟勤監修 説文会編『説文入門』大修館書店(1983).
[2] 福田襄之介:『中国字書史の研究』, 明治書院(1979).

- [3] 坂内千里:『経部引用書から見た「説文解字繫傳」注釈考』, 大阪大学出版会(2014).
[4] 高久由美:『説文解字』祖本への接近(上)』, 県立新潟女子短期大学研究紀要, 第 36 集(1999), p.129-138.
[5] 福田哲之:「唐写本『説文解字』口部断簡論考」, 書学書道史研究(2003), 第 13 号, p.43-53.
[6] 邵敏:「徐鉉《説文解字繫傳》版本考」, 信陽師範学院報第 27 卷, 第 6 期, (2007.12), p.92-95.
[7] 王獻唐:「説文繫傳三家校語抉録」, 山東省立図書館, 季刊第 1 集, 第 1 期(1931), 校勘 p.1-70.
[8] 段玉裁:『汲古閣説文訂』, 五硯樓(1797).
[9] 段玉裁:『説文解字注』, 経韻樓(1815).
[10] 花登正宏:「古今韻会挙要所引説文解字考」, 大阪市立大学大学院文学研究科紀要, 38 卷(1986), 4 号, p.335-352.
[11] 中前千里:『古今韻会挙要』に引く『説文解字』について』, 『漢語史の諸問題』京都大学人文科学研究所, 1988/03, p.341-366
[12] 糸原敏章:「張次立による『説文解字繫傳』の校訂について」, 東京大学中国語中国文学研究室紀要(12), (2009), p.1-24.
[13] 吉田早恵:『説文解字篆韻譜』伝本考』, 中国語学(234), (1987) p.1-10.
[14] 工藤早恵:「十巻本『説文解字篆韻譜』について」, 東京都立大学人文学報, 213 号(1990), p.49-63
[15] 工藤早恵:「清代中葉期における『説文解字篆韻譜』研究について」, 比較文化研究, 39 号(1998), p.45-51
[16] 鈴木俊哉、鈴木敦、菅谷克行:「『説文解字』小徐本の版本比較における字形差判断基準の調査」, 第 15 回情報科学技術フォーラム講演論文集, 第 4 分冊, p.15-22.
[17] 王勝昌:「説文篆韻譜之源流及其音系之研究」, 国立台湾師範大学国文研究所碩士論文(1974).
[18] 小川環樹:「説文篆韻譜と李舟切韻」, ビブリア天理図書館報, 75 号(1980), p.418-425
[19] 上田正:『切韻逸文の研究』, 汲古(1984).
[20] 工藤早恵:『説文韻譜校』補』, 『慶谷壽信教授記念中国語論集』, 好文出版(2002), ISBN 4-87220-061-6, p.121-129
[21] 川幡太一:「説文解字注データ」,
<http://kanji-database.sourceforge.net/dict/swjz/index.html>
[22] 川幡太一:「宋本廣韻データ」,
<http://kanji-database.sourceforge.net/dict/sbgy/index.html>
[23] 工藤早恵:『説文韻譜校』補』, 『慶谷壽信教授記念中国語論集』, 好文出版(2002), ISBN 4-87220-061-6, p.121-129
[24] 川幡太一:「小篆フォント “SW.ttf” ⇔UCS 対応表」,
<http://kanji-database.sourceforge.net/fonts/swfont/index.html>

²⁴ 『校録』での指摘状況に関しては表 1 に記した。研究者が記録の必要ありと判断する字形差には大小ばらつきがあり、また、比較対照も宋刊大徐本ではなく清刊大徐本であるので、報告されていないものは全て宋刊大徐本と同じであったとは言えない。特に『考異』の判断基準はかなり緩やかであることを[16]で指摘した。

²⁵ 『篆韻譜』からの影響の可能性があることは大西克也氏より指摘を受けた。南宋の李燾(1115～1184)の『説文解字五音韻譜』の序文には、『篆韻譜』の刻本は見ることができた一方、小徐本を探索しても 40 巻のうち 7～8 巻を得るのみであったことが書かれている。増補されていない『篆韻譜』の流通量や期間の推測は難しいが、小徐本よりも流通していたことは充分考えられる。